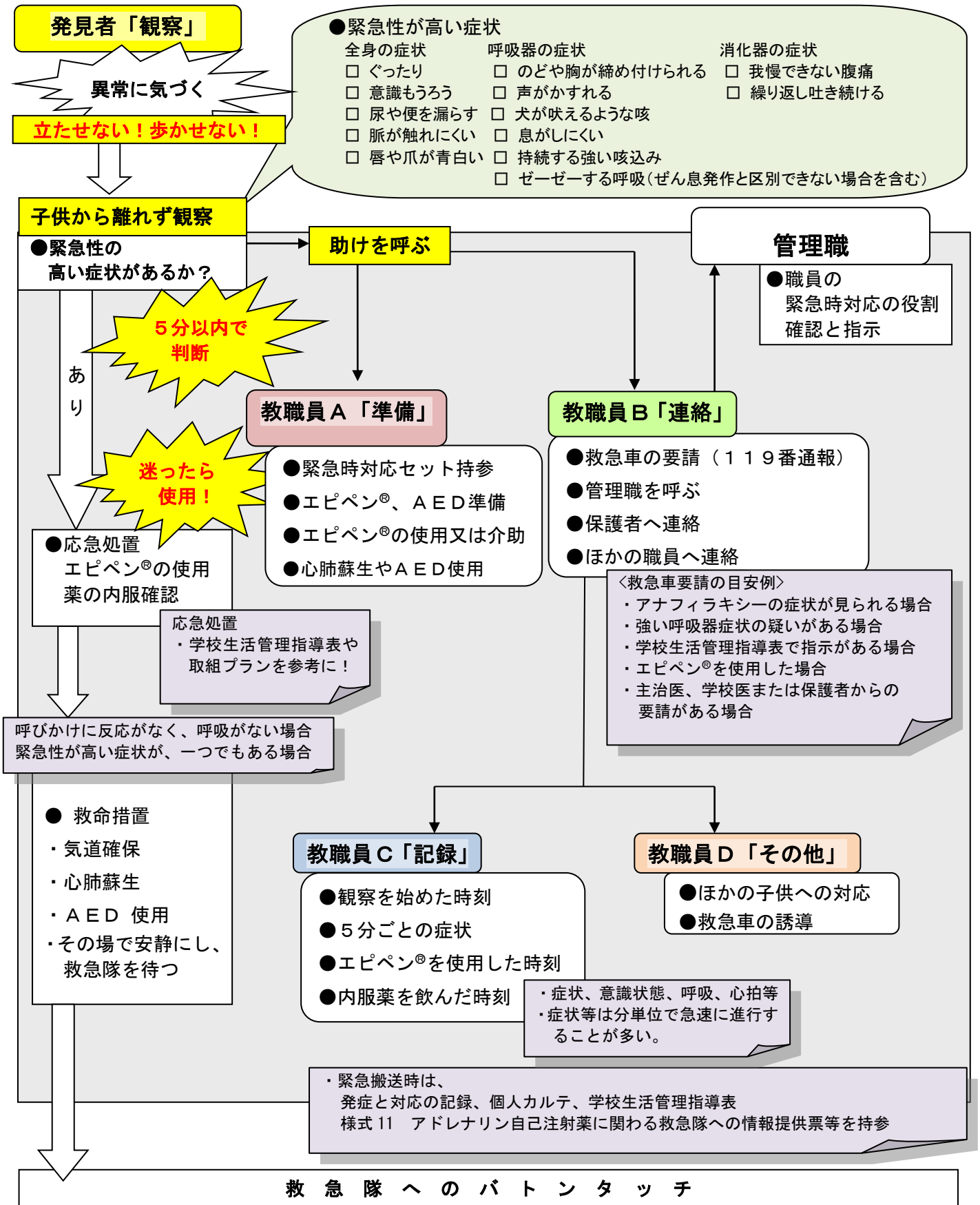


Ⅲ 緊急時対応・エピペン[®]編

1 アナフィラキシー発症時の対応の流れ（例）



2 緊急時に備えた処方薬の取り扱い

エピペン®

- エピペン®は、アナフィラキシーショックを起こす危険性が高く、万一の場合、直ちに医療機関での治療が受けられない状況下にいる者に対し医師が処方するアドレナリン自己注射薬（商品名エピペン®）である。

エピペン®の処方対象者

過去にアナフィラキシーショックの既往がある者で、症状の進展が早くて時間的に猶予のない者、致死的なアナフィラキシーを経験されている者、近隣の医療機関が遠く緊急時にすぐに対応してもらえない者などに処方される。

- ・ 子供がエピペン®の処方を受けている場合には、エピペン®に関する一般的知識や処方を受けている子供についての情報を教職員全員が共有しておく必要がある。これは、予期せぬ場面で起きたアナフィラキシーに対して、教職員誰もが適切な対応をとるために不可欠である。

エピペン®の管理

子供がアナフィラキシーショックに陥ったとき、エピペン®を迅速に使用するためには、子供本人が携帯・管理することが基本である。しかし、それができない状況にあり対応を必要とする場合は、子供が安心して学校生活を送ることができるよう、エピペン®の管理について、保護者、本人、主治医、学校医、学校薬剤師等と十分な協議を行っておく必要がある。

- ・ 子供の在校中に、学校が代わってエピペン®の管理を行う場合には、学校の実情に即して、主治医、学校医、学校薬剤師の指導の下、保護者と十分に協議し、その方法を決定する。
- ・ 方法の決定にあたっては、以下の3点を確認しておく。
 - ①学校が対応可能な事柄
 - ②学校における管理体制
 - ③保護者が行うべき事柄（使用期限、破損の有無等の確認）など
 - * 保管中に破損が生じないように注意するが、破損等が生じた場合の責任は負いかねる等

エピペン®は含有成分の性質上、次のような保管が求められる。

- ・ 光で分解しやすいため携帯用ケースに収められた状態で保管し、使用するまで取り出すべきではない。

エピペン®の注射について

- ◆ エピペン®は、本人もしくは保護者が自ら注射するというのが基本である。
- ◆ エピペン®を自らできない状況にある子供に代わって、教職員が注射することも場合によってはありうる。
- ◆ エピペン®は、一時的に症状を緩和する薬剤であるため、使用する場合は、併せて救急車を要請する。
- ◆ アナフィラキシーではないのに誤ってエピペン®を打った場合には、ほてり感や心悸亢進（心臓がドキドキする）などの症状が起こるが、あくまでも一時的な現象です。15分程度で元の状態に戻る。

救急救命士によるエピペン®注射

アナフィラキシーショック

緊急搬送を依頼する際、消防機関に伝えること

- ① 発症状況（いつ、どこで、何をして、どうなったのか）や主訴（子供の訴え）
- ② エピペン®処方の有無、使用の有無、緊急時連絡先（医療機関）
- ③ アレルゲンの摂取、吸入、接触等の可能性があるかどうか、時間はどのくらいか
- ④ 過去に同じような症状があったかどうか

- * エピペン®の処方を受けている子供の場合には、その旨を消防機関に必ず伝える。
- * 救急救命士は、エピペン®を携帯していない。本人に処方されているエピペン®を使用する。
- * 細かな情報が分からなくても、救急車は出動する。出動後も情報を提供することは可能である。

上記のことが分からない場合でも、通報に遅れが生じることも予想されるので、

「細かい状況が分からない場合でも、まず通報を！」

エピペン®使用の目安

エピペン®は、本人もしくは保護者が自ら注射する目的で作られたものであるため、注射の方法や投与のタイミングについて、医師から処方される際に本人と保護者が十分な指導を受けている。

- ・ 投与のタイミングは、アナフィラキシーショック症状が進行する前の初期症状（呼吸困難などの呼吸器症状が出現したとき）のうちに注射するのが効果的である。

参考：一般向けエピペン®の適応（日本小児アレルギー学会）

消化器の症状	・繰り返し吐き続ける	・持続する強い(がまんできない)おなかの痛み
呼吸器の症状	・のどや胸が締め付けられる ・持続する強い咳込み	・声がかすれる ・ゼーゼーする呼吸 ・犬が吠えるような咳 ・息がしにくい
全身の症状	・唇や爪が青白い ・意識がもうろうとしている	・脈を触れにくい・不規則 ・ぐったりしている ・尿や便を漏らす

エピペン®の仕組み



「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」より引用

エピペン®の使用手順

STEP 1 準備

携帯用ケースのカバーキャップを指で開け、エピペン®を取り出します。オレンジ色のニードル(針)カバーを下に向けて、エピペン®のまん中を利き手でしっかりと握り、もう片方の手で青色の安全キャップを外し、ロックを解除します。



STEP 2 注射

エピペン®を太ももの前外側に垂直になるようにし、オレンジ色のニードル(針)カバーの先端を「カチッ」と音がするまで強く押し付けます。太ももに押し付けたまま数秒間待ちます。エピペン®を太ももから抜き取ります。



STEP 3 確認

注射後、オレンジ色のニードル(針)カバーが伸びているかどうかを確認します。ニードル(針)カバーが伸びていれば注射は完了です(針はニードルカバー内にあります)。



STEP 4 片付け

使用済みのエピペン®は、オレンジ色のニードル(針)カバー側から携帯用ケースに戻します。



★誤注射を避けるための正しい持ち方

- オレンジ色のニードル(針)カバーの先端に指などを押し当てると、針が出て危険です。絶対に行わないでください。
- 危険ですので絶対に分解しないでください。
- もしも、誤ったところにエピペン®を使用してしまったら、直ちに最寄りの医療機関を受診してください。

正しい
持ち方



誤った
持ち方



マイランEPD合同会社 エピペンサイトからの引用

「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」より引用

エピペン[®]の保管について

児童生徒等がエピペン[®]を処方され、携帯している場合、そのエピペン[®]を学校が管理する場合と学校が保管場所を提供しない場合があります。

1. 学校が管理する場合

学校や児童生徒等の状況は様々なので、画一的に学校での保管方法を指定することは出来ません。しかし、1) 利便性と 2) 安全性を考慮した上で、それぞれの学校での最善の保管方法を検討する必要があります。

1) 利便性

エピペン[®]の注射が必要となったとき、速やかにエピペン[®]を現場へ持参できるような保管場所や保管方法を考慮してください。また、児童生徒等が登校時にエピペン[®]を保管場所へ持参し、下校時に受け取って帰宅する上で、負担にならない利便性の高い場所が望ましいです。

2) 安全性

他の児童生徒等がエピペン[®]に触れ、誤射等の事故が起きないようにすることが必要です。このため、児童生徒等の目に触れやすかったり、手が届きやすかったりする場所を避けます。実際に多い対応例は以下のようなものです。

(例)

エピペン[®]を処方されている児童生徒等が登校とともに、一元化された管理者（校長、副校長、担任、養護教諭等）に赴き、校長室、教員室、保健室等に預ける。

保管場所は固定され、全ての教職員がその場所を把握する。また、管理者が不在の時などの対応方法を事前に十分協議して決定しておき、その内容も全ての教職員が把握する。

児童生徒等は下校時に管理者に赴き、エピペン[®]を受け取り、帰宅する。

2. 学校が保管場所を提供しない場合

1) 利便性

エピペン[®]の使用が必要となった時に、児童生徒等が保管場所を第3者に伝えることが困難な場合があります。このため学校は、児童生徒等が日頃どこにエピペン[®]を保管しているか事前に聞いて、把握しておく必要があります。

2) 安全性

学校が保管場所を提供しない場合、児童生徒等はエピペン[®]を教室で、ランドセルや机、ロッカーなどに保管することが多いです。この場合、不特定多数の児童生徒等がエピペン[®]に触れることが可能となり、意図せずまたは意図的にエピペン[®]に触れる可能性が高まります。その結果、他の児童生徒等がエピペン[®]を誤射するなどの事故が発生する可能性があります。学校はエピペン[®]の保管場所を提供しない場合、誤射事故に対するリスク管理（アレルギーがある児童生徒等及びその他の児童生徒達への注意喚起など）を徹底する必要があります。また、万が一の誤射事故への対応も事前に準備しておく必要があります。

なお、エピペン[®]は常温管理であれば、使用期限内の品質に問題は生じません。このため、冷蔵庫での管理はむしろ不適當です。

(参考) 野外活動や修学旅行に行く場合の管理

アレルギー対応食に不慣れたホテルや旅館、ソバ打ち体験等、校外活動や修学旅行は普段の学校生活よりもアナフィラキシー事故の発生する危険性が高まります。事前の打合せを綿密にするのはもちろん、エピペン[®]の管理や事故を想定した準備も重要です。

1) 事前確認

事前に児童生徒等がエピペン[®]を携行するかどうかを保護者に確認し、行程中の管理を話し合っておきましょう。

2) 行程中の管理

学校は、当該児童生徒等の行程を常に把握します。特に小グループ行動や自由行動の時には、目が離れやすいので注意が必要です。

学校がエピペン[®]を管理する場合、管理者は特定の教職員に定めます。当該児童生徒等の行程とともにエピペン[®]も移動する必要があるため、管理者は児童生徒等と行動を共にします。自由行動の時などは、一時的に児童生徒等に管理を任せることも考える必要があります。

3) 現地の医療機関の確認、確保

エピペン[®]を使用した場合には、その後医療機関を受診する必要があります。また、事前に行程先の医療状況を十分に調査しておきましょう。事故時に児童生徒等の搬送先として想定される病院には、事前に学校から了解を得ておくと、万が一のときに迅速に対応できます。